

日本赤十字社静岡県支部連携・共同表現プロジェクト活動記録 「紙芝居&絵本・表現プロジェクト1. 2. 3 (2017年~2020年)」

Japan Red Cross Shizuoka Collaboration / Joint Expression Project Activity Record
"Kamishibai & Picture Book : Expression Project 1.2.3 (2017-2020)"

キーワード：

赤十字
イラストレーション
紙芝居
絵本
地域連携

抄録

2017年7月から2020年3月にかけて日本赤十字社静岡県支部主催で本学造形学部造形学科のデジタル表現デザインコースと連携共同プロジェクト3つを行った。日本赤十字社静岡県支部では、若い人をはじめとした多くの人に赤十字を知ってもらうことを目的に学校などで活用できる教材制作に取り組んでいる。第1弾、赤十字の創始者であるアンリー・デュナンの生涯を描いた紙芝居「アンリー・デュナン物語」、第2弾、子どもたちの思いやりやさしさを育くむきっかけになるようにと日赤のマスコットキャラクターであるハートラちゃんを題材とした絵本「ハートラちゃんのおはなし」、第3弾、日本赤十字社の創設者である紙芝居「さのつねたみ物語」のプロジェクトを管理しながら学生たちの制作指導に当たった。完成した作品は、県下の幼稚園、小中高等学校、特別支援学校、図書館などへ配布した。

日本赤十字社静岡県支部では、若い人たちをはじめとする多くの人に、日本赤十字社が「人間のいのちと健康、尊厳を守る」という使命のもとに活動していることを知ってもらうために、学校等で活用できる教材制作に取り組んでいる。10～20代の若い人に赤十字のことを学ぶ機会になってほしいという考えから原稿の提供を受け、常葉大学造形学部の学生に原画制作の依頼を頂いた。

日本赤十字社が行った「赤十字に対する意識調査」では、活動の認知度が若くなるにつれて低くなっていることに気づき、若い世代に、より赤十字への興味と関心を持ってもらうために、小・中・高等学校や特別支援学校の児童・生徒には紙芝居を、幼稚園・保育所・子ども園の園児たちには絵本をそれぞれ配付する計画を立てた。これらの教材を活用することで、子どもたちが積極的に青少年赤十字活動へ取り組んでほしいという希望を元に学生と共にこのプロジェクトを進めた。

本学造形学部造形学科のデジタル表現デザインコース学生たちは2017年7月からプロジェクト第1の紙芝居「アンリー・デュナン物語」をはじめに、2018年からプロジェクト第2の絵本「ハートラちゃんのおはなし」、2020年3月までプロジェクト第3の紙芝居「さのつねたみ物語」を制作し、その指導にあたってきた。



左順から、紙芝居「アンリー・デュナン物語」、2018
絵本「ハートラちゃんのおはなし」、2019
紙芝居「さのつねたみ物語」、2020
全ての文は、日本赤十字社静岡県支部

第1. プロジェクト 紙芝居「アンリー・デュナン物語」 2017年7月～2018年1月頃

「アンリー・デュナン物語」は、子どもたちに赤十字の活動を知ってもらうための、戦争救護の礎を築き、第1回ノーベル平和賞を受賞した創始者であるスイス人の「アンリー・デュナン」の生涯とどのようにして赤十字をつくり、広めていったのかを描いた物語だ。“そもそも赤十字とは何か”をわかりやすく伝えるため、当時デジタル表現デザインコース3年生の学生たちを中心に紙芝居「アンリー・デュナン物語」を半年かけて共同で制作した。

■参加学生（以下6名）

- Aグループ：宮坂奈々、戸塚千尋、片山 渚
- Bグループ：故 大村勇貴、鈴木里実子
- Cグループ：青柳 有紗

■制作プロセス

- ① アンリー・デュナンの人物及びキャラクター分析
- ② 原稿構成からイラストレーション制作
- ③ イラストレーション修正・編集
- ④ 完成作発表・審査
- ⑤ 引き渡し式・社会発信

今回のプロジェクトは、全3つのグループからなる6人の学生のノミネート作品を赤十字支部関係者たちがプレゼンテーションを通して1次審査し、赤十字での2次の内部審査で最終的に1つ作品を選定する方式で行われた。プロジェクト参加者は、制作を希望する学生たちが自由に自分たちで制作グループを構成した。それぞれ自主的に作品の制作を進めるが、周期的な中間評価と意見交換、修正を経て全体的に完成度を高めて制作を行った。

紙芝居とは、主に子供たちを対象にしている物語ごとに絵（以下イラストレーション）で表現して、それを1枚ずつ見せながら、演じ手が物語である文書を語りながら演じて形になって進める。特に文字がイラストレーションの上に書いていないので読み聞かせる人

の役割はもちろん、イラストレーションの情報伝達力がとても大事なジャンルである。多少絵本と似てる部分もあるが、絵本は「物語をイラストレーションと文、本というメディアで表現する」ことであって、学生たちはその特徴などを意識しながら制作を進めた。

① アンリー・デュナンの人物及びキャラクター分析

アンリー・デュナンは実在した人物なので、史実に基づいてその時代を意識し、人物を表現することに重点を置いた。各参加グループは赤十字から提供された資料をもとに情報リサーチを行い、これをもとにキャラクターを作った。紙芝居をみる対象は小・中・高校生ということで対象が広く、表現方法が難しすぎると低学年にはやや硬くなり興味を失わせ、逆にあまりにも単調になると高学年には興味を失う恐れがあるので、それを意識しながら人物が持つ特徴を最大限シンプルに表現するようにアドバイスをした。

3つのグループはアンリー・デュナンの特徴を分析し、それぞれキャラクターをデザインした。その結果、Bグループのキャラクターデザインは最もオリジナリティがあるが、キャラクターだけの特性がやや個性が強く、低学年には難しいかもしれないし、Cグループの作品は分かりやすいが相対的に高学年には少し単調に感じられるという評価を受けた。Aグループの作品は、両チームに比べて中立的な特徴を見せていて伝達力も強いが、多少単調になり得るという評価を受けた。

【各グループが提案したキャラクターデザイン】



A グループ

B グループ

C グループ



3グループの作品制作スタディー風景

② 原稿構成からイラストレーション制作

原稿の内容は史実に基づいた文章であったため、発生年度や数字、場所の地名などが多く書かれていた。赤十字から提供された原稿を修正することはできなかったため、原稿からできるだけ中心となるキーワードを重要な順に選定し、これを基に Adobe Photoshop や Clip Studio でイラストレーションを制作し始めた。とくに対象である学生たちを意識して、戦争に関する場面や傷ついた兵士たちが登場する場面は、事実を表現しながらも、刺激過ぎない範囲内で物語を理解できるように表現するように意識した。

③ イラストレーション修正・編集

イラストレーション制作を進める上で一番重要に考えた部分は、ビジュアルを通してきちんとメッセージを伝えることだった。原稿を耳で聞きながらイラストレーションを通じてそれを理解できるかを確認する必要がある。そのため、途中に進行状況をチェックする際には、必ず学生の中で誰かが音読の役割をして文章を声に出して読むようにし、イラストレーションを通じて内容をきちんと理解できるかを絶えず確認した。史実に基づいた内容なので、その時代の人物の衣装や建物、そして赤十字マークは実際使われているロゴに合わせて修正を重ねた。作品が70%程度できたら、赤十字社へ送り、赤十字側の意見も反映して細かいところまで繰り返し修正して完成度を高めていった。



修正指示事例

④ 完成作発表・審査

3つのグループの各完成作品は造形学部の関係者による1次審査、2次審査は赤十字の内部審査で最終的に選抜するコンペ式で行った。

1次の審査は2017年9月26日、瀬名キャンパス校内で行った。審査員は赤十字の関係者たちとアドバイザーとして理事長夫人木宮様、造形学部の合津正之助先生、チラユ・ボンワルット先生が参加した。審査当日は各グループでプレゼンテーションを行い、代表学生が音読で物語を読みながら3つのグループのイラストレーションをめくりながら進行的した。

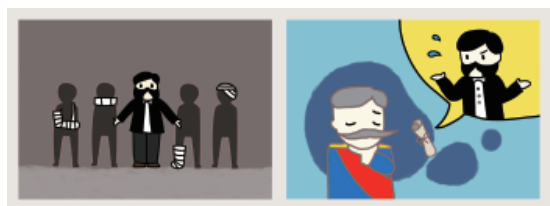
個性が強くオリジナリティが最も目立ったBグループの作品と総合的なバランスがよく調和していたAグループの作品が競合し、2次審査まで最終検討を経て、最終的にAグループの作品が最優秀作品に選ばれた。
*後のページに最優秀作品全文を掲載



構内で関係者たちとの作品審査の様子



B グループの作品一部



C グループの作品一部

⑤ 引き渡し式・社会発信

2018年1月16日、日本赤十字社静岡県支部で紙芝居「アンリー・デュナン物語」の完成原画の引き渡し式を開き、作品引き渡しと表彰が行われた。

式は第2回指導者協議会役員会青少年赤十字事業を推進するうえで現役の校長先生や教育関係者20名ほどが参加する会議の続きで開かれた。紙芝居は青少年赤十字事業の一環として取り扱われており、県からは教育委員会の課長並びに静岡市と浜松市の教育委員会の課長、現役の校長先生も参加し、学生たちの作品のお知らせや普及をする良い機会となった。



引き渡し式の様子・新聞記事

色校正や紙の打ち合わせを終えて印刷まで完成した作品は県内の全ての小・中・高等学校、特別支援学校(973校)などへ配布された。

2018年5月27日、静岡県コンベンションアーツセンター・グランシップで開催された「第58回静岡県青少年赤十字大会」では完成した紙芝居作品を披露・発表し、参加した県下青少年赤十字メンバーのアンリー・デュナンへの理解を高めるきっかけとなった。

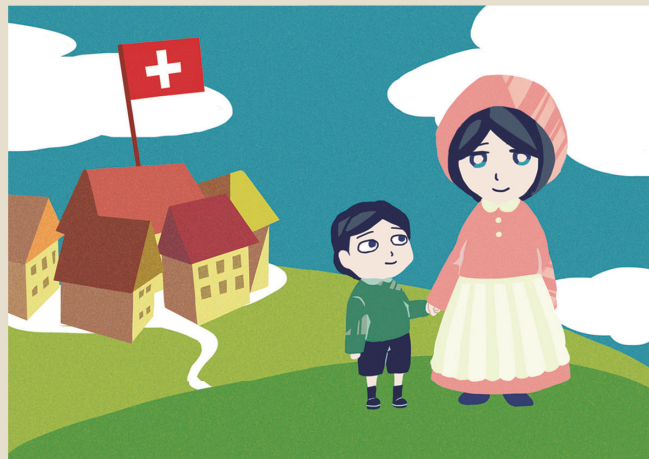


1. アンリー・デュナン物語 (ものがたり)

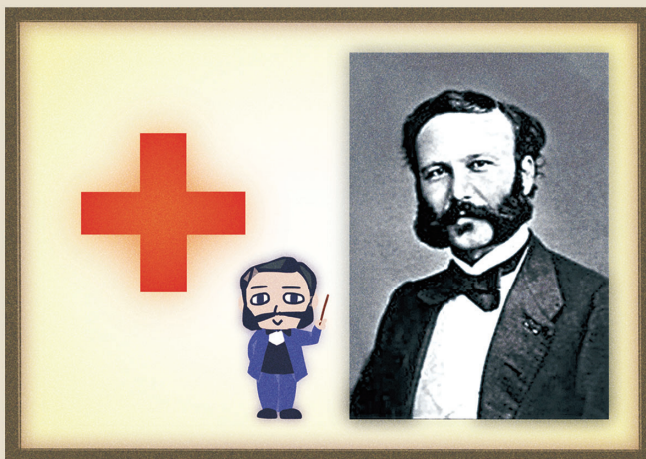
真ん中にいる人物が、この紙芝居の主人公『アンリー・デュナン』です。

この人はいったいどんなことをした人なのでしょう？

これから始めるこの物語を通じてぜひ知ってください。



4. アンリー・デュナンは、1828年5月8日、スイスのジュネーブという都市で生まれました。お母さんはたいへん優しい人で、まずしい人や病気の人のためにつくす人でした。デュナンもいつか、お母さんと同じ気持ちをもつようになりました。



2. この写真の人を知っていますか？そう、この人が『アンリー・デュナン』です。このマークを見たことはありますか？そう、赤十字のマークです。この紙芝居は、赤十字のしくみを作ったアンリー・デュナンの物語です。



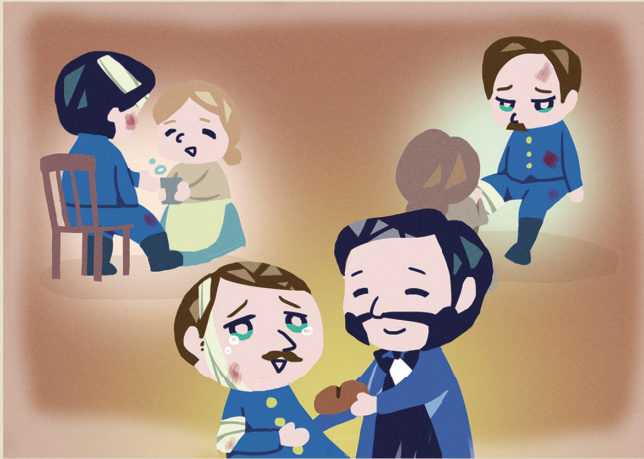
5. やがて、大人になったデュナンは、仕事のため、北イタリアを訪れたとき、一生忘れられないできごとを目にします。それは、フランス軍15万人とオーストリア軍17万人がイタリアのソルフェリーノという場所ではげしくぶつかり合い4万人ともいわれる死者がでた戦争です。



3. 赤十字は、苦しんでいる人、困っている人がいれば、世界中の誰にでも手をさしのべます。生まれた国が違っていても、肌の色が違っていても、また、信じる神様が違っていても、みんな同じ人間だから。デュナンの生き方を通じて、赤十字のことをもっとよく知ってください。



6. 病院や教会は、たくさんの傷ついた兵士であふれていました。「苦しい…」、「助けて…」、「水を…」デュナンは、そのありさまを胸のはりさけるような思いで見つめていました。



7. なんとかして助けなければ…。

デュナンは、町の人たちに呼びかけ、救護隊をつくりました。

みずから傷ついた兵士を手当てするとともに、コーヒーやパンを一人ひとりに渡して、けんめいに力づけました。



10. やがて戦争が終わり、ジュネーブに戻ったデュナンは一冊の本を出します。

「ソルフェリーノの思い出」その本の中で、デュナンは戦争を起こしてはいけない、それができないなら「平和な時から、敵味方の区別なく助ける団体をつくるべきだ」とうたったえます。デュナンのうったえは、世界中の人々の心を動かしました。



8. 傷ついた兵士のなかには、敵の兵士もいました。

「敵の兵士を助けるのか？」と言う人もいました。

デュナンは言いました。

「傷ついた者に、敵も味方ありません。人間はみんな兄弟です。」



11. そして1863年、ジュネーブにデュナンを含む5人のスイス人が集まり、戦争で傷ついた人たちを助けるための委員会ができました。

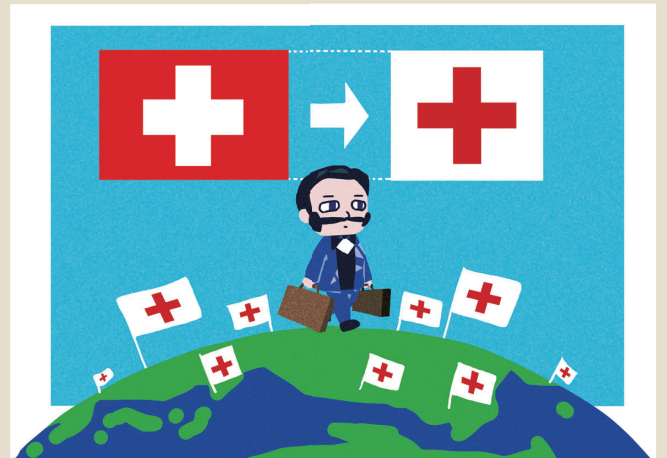
デュナンや委員会の考えを広めるため、デュナンは何カ国も旅をしました。そしてたくさんの国に協力をもとめ、同じ年、正式に赤十字の約束がつけられました。この約束をジュネーブ条約（赤十字条約）とよんでいます。



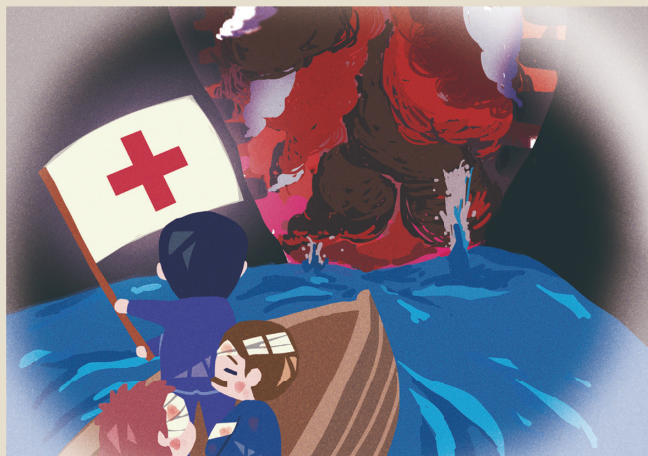
9. 傷ついた兵士の数は、どんどん増えていきましたが、医者の数が足りません。

デュナンは「戦いに負けてつかまっているオーストリア軍の医者を自由にしてください」と、フランス皇帝ナポレオン3世にたのみました。

その熱意に心を動かされた皇帝は、敵の医者が自由になることをゆるしました。



12. これはこのとき決まった赤十字のマークです。デュナンとスイスの人たちの努力をたたえ、スイスの国旗の色を逆にしたものになりました。ようやく、デュナンのうったえがひとつのかたちになってスタートしたのでした。しかし、デュナンは赤十字のことに夢中になりすぎ、自分の仕事に失敗してしまいます。スイスを去り、ひとりで赤十字の活動を広めながら、各地を転々とする生活をつづけました。



13. それから7年後、フランスとプロシアの間で、戦争がはじまりました。デュナンは再び戦場に立っていました。そして傷ついた人たちを舟に寄せ避難させていました。デュナンが赤十字（せきじゅうじ）の旗を大きくふると、攻撃はびたりとやみました。「この旗の下には、傷ついた者だけがいるので、攻めてはいけない」という、赤十字の約束をわかってくれていたのです。



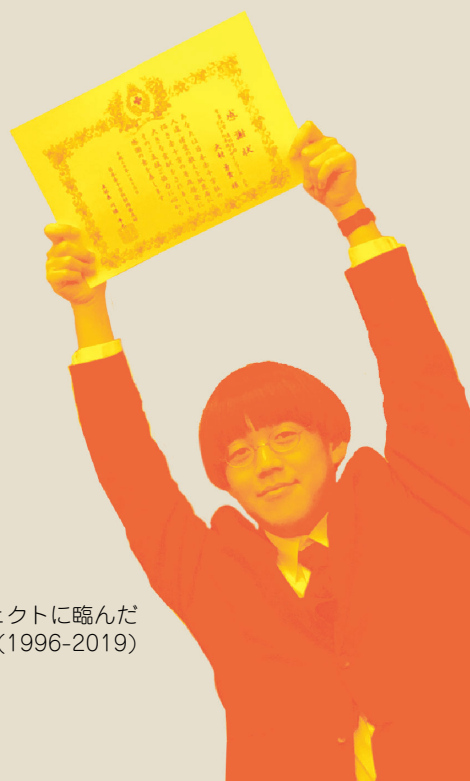
14. さらに30年後の1901年デュナンが73歳の時、赤十字を作った努力が認められ、第1回ノーベル平和賞が贈られました。「各国民が団結して、良心にしたがって行動すれば、戦争を防ぐことができる。」このアンリー・デュナンの言葉は、今も生き続けています。



15. アンリー・デュナンがつくった赤十字は、今では190以上の国と地域に広がり、9,000万人以上のボランティアがその活動を支えています。日本の赤十字も、アンリー・デュナンの想いを受け継いで、赤十字の旗の下、苦しんでいる人を助けるために活動をしているのです。「気づき、考え、実行する」JRC（青少年赤十字）の態度目標です。あらためて皆さんには何が出来るでしょうか？このお話をもとに考えてみましょう。

A3サイズ、全15枚、（両面）表／絵・裏／文、
1000部、2017年12月初刷発行

一緒に楽しくプロジェクトに臨んだ
故 大村勇貴君（1996-2019）





絵本「ハートラちゃんのおはなし」

第2. プロジェクト 絵本「ハートラちゃんのおはなし」 2018年5月頃～2019年2月頃

2018年5月、日本赤十字社静岡支部から、子どもたちの「思いやり」や「やさしさ」の心を育むきっかけになるように、日本赤十字社の公式マスコットキャラクターである“ハートラちゃん”を主人公とした絵本「ハートラちゃんのおはなし」の制作依頼を頂いた。

今回は「苦しんでいる人を救いたい」という赤十字の思いを、子どもたちに分かりやすく伝えるために、絵本というメディアの形式で制作するようになった。

対象は幼児たちで、子供の理解を高めるためにメッセージを効率的に伝える手段として、そのメディアを絵本に決めたことが指導に重要なポイントだった。特に子供たちがお話を理解しやすくするために、何よりも文とイラストレーションと編集のバランスが重要になっているため、これを重点に指導に当たった。

制作に参加する学生の選抜は第一プロジェクトの時と違って、短い制作期間のスケジュール管理や円滑な制作のために当時、参加希望者デジタル表現デザインコース3年生5名が共同で制作した。

■参加学生（以下5名）

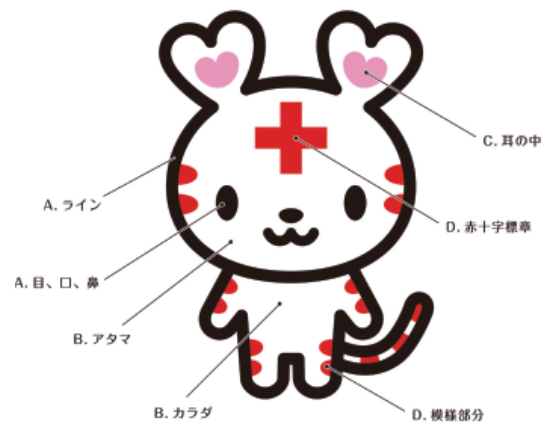
松浦沙樹、松本直子、宮内優希、望月結真、渡部彩梨

■制作過程

- ① 原稿分析
- ② ハートラちゃんメインキャラクター分析及び補助キャラクター設定
- ③ 原画イラストレーション制作
- ④ 編集デザイン
- ⑤ 引き渡し式・社会発信

絵本制作の手順は、まず原稿を理解して分析し、キャラクターを設定して、それを中心に背景及び全体的な画面を構成し原画を描きながら、ページに合わせて編集デザインをするという順に進めた。

カラー指定



CMYK の場合		DIC の場合	
A	Black 100%	A	Black 100%
B	White 100%	B	White 100%
C	M 50%	C	DIC 24
D	M100%+Y100%	D	DIC198



ハートラちゃんキャラクターの使用条件の一部

ただし、今回の絵本の制作において大きく制約があったのは、メインキャラクターである日本赤十字のマスコット、ハートラちゃんの基本制作条件を崩さずに、ありのままの形でこれに合わせて背景と補助人物など、要素を合わせて制作することであった。キャラクターが持つ本来のデザインのコンセプトや全般的な印象を保ちながらも、それにふさわしいイラストレーションを通じて絵本で伝えたいメッセージが上手く伝わるようにすることを重点とした。

① 原稿の分析及びページ分割

全24ページで制作予定の幼児向けの絵本は、先に赤十字から受け取った原稿を分析してページを再構成する作業が必要だった。絵本はページからページへ移る空間の時間を読者が調節して流れを汲んでいくため、省略により早すぎる呼吸になったり、逆に退屈すぎる呼吸にならないように場面の演出における繋がりを考慮することを重視した。

絵本は紙芝居と違って、「絵と文で表現されたお話の本」である。そのため「絵で表現されたこと」はどこまで文で表すか、「文で表現されたこと」はどこまで絵に表すかで、お互いを支え合っている特徴を考えなければならなかった。



各パーツのバランスや大きさや位置を変えて使用しないでください。



変形して使用しないでください。



画定色以外のカラーを使用しないでください。



部分的なモノクロ使用はしないでください。



強いパーツや見えにくい背景の上では使用しないでください。



飯食いタイガー

過激な言葉は言わせしないでください。
詳細はハートラちゃん 言葉まわり使用例ページをご覧ください。



頭のクロスは絶対に取らないでください。



勝手にイラストを加えたり何かを持たせたりしないでください。

ハートラちゃんキャラクターの使用禁止例

② ハートラちゃんメインキャラクター分析及び補助キャラクター設定

学生たちはイラストレーション制作のためにまず、ハートラちゃんのキャラクターの特徴を分析した。ハートラちゃんのキャラクターの基本的なデザインベースはもちろん、応用して使えるキャラクターのポーズをいくつかもらっており、先にこれを把握した上で原稿の物語で活用できるものを選ぶ作業を行った。キャラクターのオリジナリティを損なわないため、表情や動作などはできるだけ既存のデザインポーズ構成の中から選んで工夫して使用した。

特に「ハートラちゃん」の新たな表情や動作の作成等、原画以外に新たな表情や動作を表すデザインの作成を希望する場合は、キャラクターデザインを担当した企画広報室に相談が必要となり、適宜デザインの更新（原画の追加等）を検討する必要があったので慎重に作業を進めた。

学生たちが制作する過程で最も苦労した部分は、「線に対する理解」。基本的にメインキャラクターを表現する線の太さを意識しながらそれに合わせて他のイラストレーションの制作に臨んだが、線の太さや色の合わせはそれぞれの要素の大きさによって感じが大きく変わった。そのために、制作の始まりで一番最初に要素に合わせて太さに変化を与えることに時間を割いた。

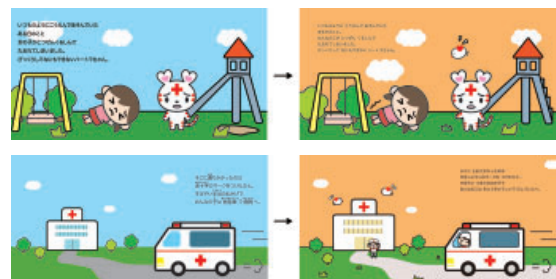


登場キャラクターの修正例

③ 原画イラストレーション制作

主人公ハートラちゃんのキャラクターの特徴は、シンプルな線と淡泊な色彩の表現であり、本来はそれぞれ分けて作られたとしても、全体的に一つのイラストレーションのように見せるためには、それを中心とした表現が要求された。その中でも追加で人が必要な場面や動物（鳥）が入るページ、物、建物が描いてあるページはそのページの間で自然につながるようにすることが重要であった。そして背景の色も全体の雰囲気はもちろん、暖かさを保つと同時に時間の流れを表すため、単調さを避けるために意識し変化を与えた。

制作の分担は、学生たちがハートラちゃんを中心に背景と補助人物キャラクターを分けて制作を進めた。原稿に合わせて必要な人物を選定して制作し最終的にページ別に全体のバランスを合わせながら制作した。制作ツールは主に Adobe illustrator を使った。



背景イラストレーションの修正例

④ 編集デザイン

絵本における編集デザインは、ページをめくりながら読む時に読者である子供がリズムを維持しながらその世界観を理解し、物語に集中できるかどうかを意識しなければならない。そのために文字とイラストレーションの相互補完することを優先して指導した。

まず、学生たちは2ページを一つのシーンとして設定して読者が文章を読んだり、もしくは誰かが読む声を聞きながら目ではイラストレーションを見て、その世界に入って集中できるように原画と合わせて文章はできるだけシンプルに並べた。そのため、制作する時から直接声に出して文章を読みながらバランスを確認し、これに合わせて修正を繰り返した。文字はシンプルなゴシック体だが、キャラクターと物語が持つ温かさが伝わるように「ヒラギノ丸ゴ Pro W 4」書体を選択し、表紙タイトルはハートラちゃんのメイン書体の雰囲気に合わせて書体を自ら作った。見返しページのデザインは、空色の表紙をめくった時、明るくて暖かい雰囲気が高まって展開されるよう、黄色系で表現した。

⑤ 引き渡し式・社会発信

2019年3月5日、日本赤十字社静岡県支部にて、絵本「ハートラちゃんのおはなし」原画の引き渡し式が行われ、授賞式では、青少年赤十字に加盟する小百合キンダーホームの園児達もスクリーンに映された絵本作品を鑑賞した。

印刷まで終わった絵本は、県内の幼稚園や保育園、こども園など1,235園に継続して配布され、よりたくさんの子供達が絵本を読んでもらえるようになった。

2019年5月26日、静岡県コンベンションアーツセンター グランシップで行った「第59回静岡県青少年赤十字大会」では参加学生たちが絵本の読み聞かせ発表をして、作り手からの絵本のメッセージを伝えた。

引き続き、2019年10月9日、静岡県立中央図書館でも絵本の贈呈式を行った。予想以上に絵本を手にとって子どもに読ませたいという県民の声がたくさん高まり、その声に応えるため、追加で県内すべての公立図書館などへ寄贈することになった。

県立中央図書館で開かれた贈呈式で、橋本事務局長から絵本の寄贈を受けた県立中央図書館の三科守館長は、「区別なく困っている人を助ける赤十字の精神が、絵本を通じて子どもたちの中に育まれることになれば」と期待の言葉を述べられた。絵本は県内の公共図書館等142館に配布した。



発表・引き渡し式の様子



引き渡し式の様子



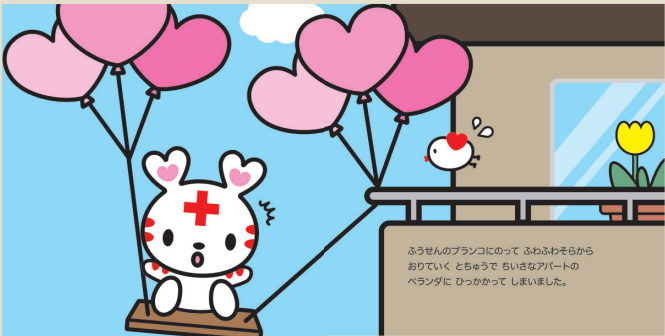
第59回静岡県青少年赤十字大会での発表



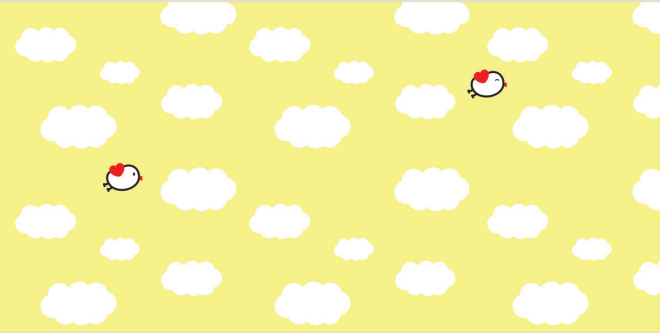
県立中央図書館で開かれた贈呈式・新聞記事



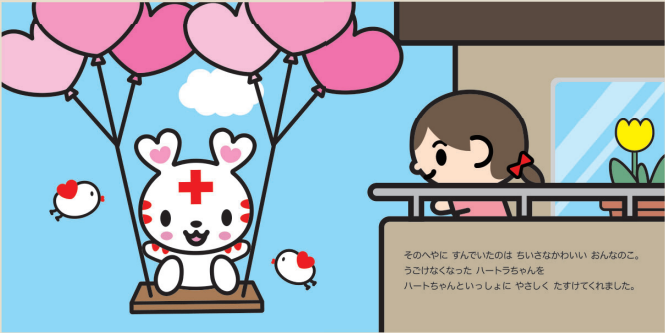
表紙



6、7 ページ



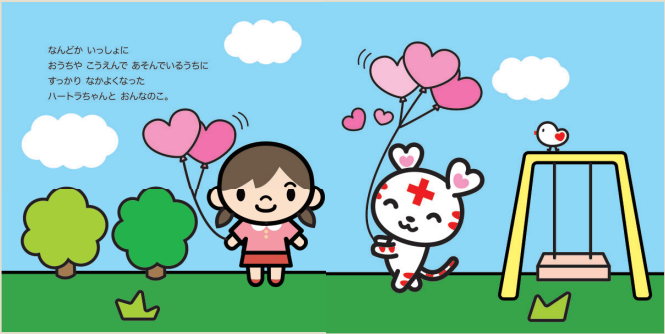
見返し



8、9 ページ



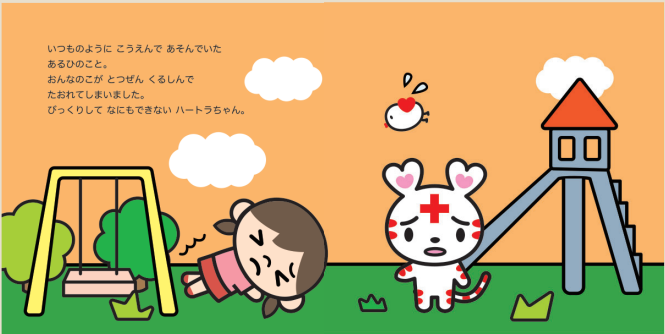
1 ページ



10、11 ページ



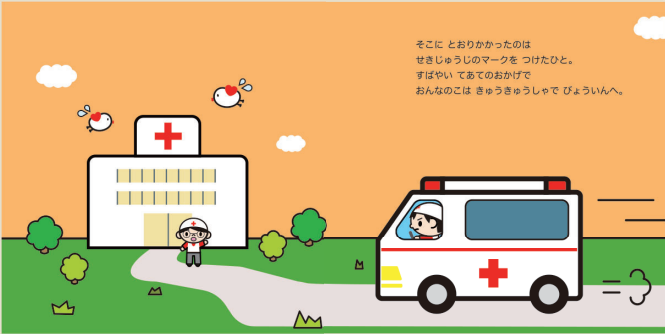
2、3 ページ



12、13 ページ



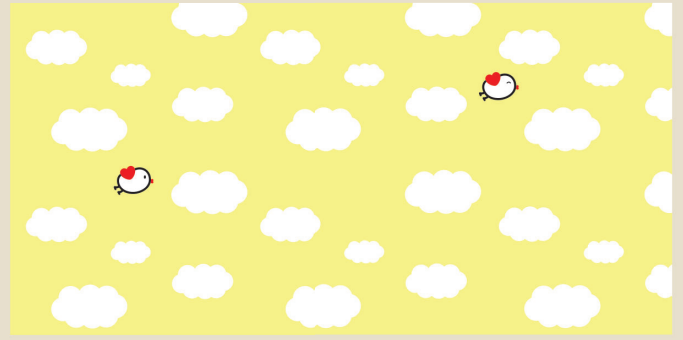
4、5 ページ



14、15 ページ



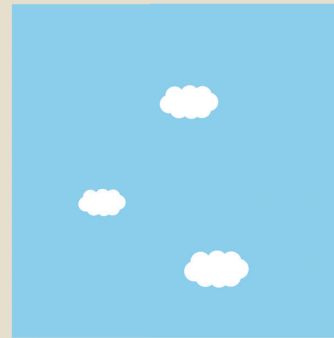
16、17 ページ



見返し



18、19 ページ



裏表紙



20、21 ページ



22、23 ページ



24 ページ

ハートラちゃんのおはなし
全 24 ページ、2019 年 5 月 初刷発行

第3. プロジェクト 紙芝居「さのつねたみ物語」

2019年6月～2020年2月頃

2019年6月から第3のプロジェクトとして日本赤十字社の創設者である佐野常民のメッセージを伝えるために、紙芝居「さのつねたみ（佐野常民）物語」の制作依頼を受け、それに取り組んだ。

紙芝居を通して、小・中・高等学校や特別支援学校の児童生徒に日本の赤十字がどのように生まれ、現在に至っているのかに興味を持ち、赤十字に対する理解を深めるきっかけになることを目指して、半年かけて当時デジタル表現デザインコース2年生と3年生の学生たちが共同で制作した。

■ 参加学生（以下4名）

松浦沙樹、宮内優希、牧野愛美、村松蒼唯

■ 制作プロセス

- ① 佐野常民の人物及びキャラクター分析
- ② 原稿構成からイラストレーション制作
- ③ イラストレーション修正・編集
- ④ 完成と色校正
- ⑤ 引き渡し式・社会発信

今回のプロジェクトは、自律的に参加を希望する学生で構成された。特に当時、デジタル表現デザインコースの3年生2人と2年生2人が参加したため、先輩と後輩間で一緒に学びながら共同で制作を進めることに意味があった。制作は前年度と同様に役割を分担して共同で行われ、中間評価と修正を重ねて完成させた。第一のプロジェクト以降、紙芝居の表現方向に改善すべき点をもとに分析し、制作に取り組んだ。

① 佐野常民のキャラクター分析

実在していた人物のため、時代や背景に合わせたキャラクターを制作することが最も重要なポイントだった。これを中心に、最初は学生がそれぞれのキャラクターの方向性を提示し、時代別に佐野常民を描いて特徴を比べながら意見交換を行った。

その中でもキャラクターの表現方向が客観的でありながらもオリジナリティがあり、親しみやすい感じで表現したデザインをメイン方向に決めた。人物担当学生はキャラクターの全般的イメージを決め、これをもとに分担して、各シーンに必要な人物を制作し始めた。



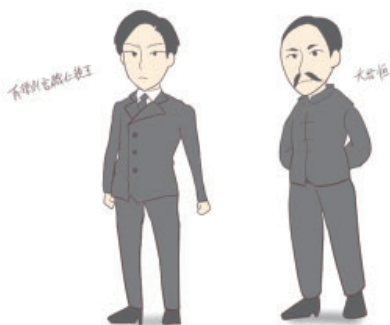
ラフスケッチ



少年時代

壮年時代

老年時代



老人

成人（スーツ）

成人

子供

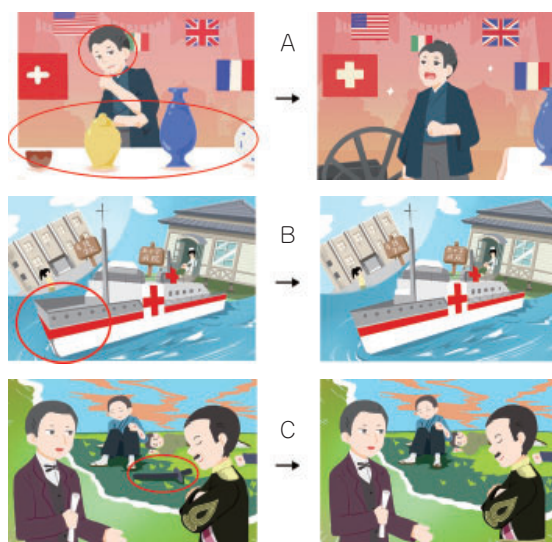
【佐野常民のキャラクター研究】

② 原稿構成からイラストレーション制作

1 番目のプロジェクトでの改善点として、特に事実に基づいたイラストレーション制作を中心に表現する事を意識した。学生たちは、各自が担当する場面のラフスケッチを描いてきて、これをもとに原稿とのバランスを考えて、主に Adobe photoshop や Clip studio を使ってイラストレーションの制作を進めた。

③ イラストレーション修正・編集

全体のイラストレーションが7割程度進んだ時点で、事実に基づいて具体的な修正を繰り返し行った。原稿の背景は日本であり、その時代を考慮した衣装や髪型、人物の雰囲気、そして建物や街の雰囲気までより客観的に伝えるように修正した。制作しながら少しずつ細かい部分を見逃すたびに、その時代の資料を調べて再確認を繰り返した。



修正指示事例

例えばAの場合は、常民の髪形についてこの時代はまだ「ちょんまげ」の時代ということで、時代背景に合わせて常民の髪形も右の髷（まげ）のように修正した。そしてパリ万国博覧会の情景について描いたシーンで、左側のイラストは全体的な雰囲気は良いのだが、常民が見ている壺や陶器は、どちらかという和日本が出展したものだと考えられた。この万博に訪れた常民は、欧米諸国の先進的な産業とアンリー・デュナンが提唱した赤十字の思想に衝撃を受けたといわれていた。そのためこの場面は、外国の展示物を見て、仲間と共に衝撃を受けている情景や表情にするように内容に合わせて修正を行った。

Bの場合は、先端が台形のように見えてしまうため当時の船の舳先の部分の形を意識して先のとがった形に見えるよう修正した。Cの場合、刀がなくても争いや、傷ついた者たちのイメージができるため、直接的に刀を入れないように修正した。

④ 完成と色校正

完成したデータを元にチラユ・ポンワルット先生が色校正に協力した。特に国旗の色が白色設定が100%に指定してなかった部分は何箇所もあり、色を合わせたり、国旗の形を修正するなど、要素の細かい部分の確認と校正が行われた。



修正指示事例

⑤ 引き渡し式・社会発信

2020年2月25日、本学静岡草薙キャンパスにて、紙芝居「さのつねたみ物語」原画引き渡し式が行われた。コロナ感染予防の観点から、前年度のような作品発表は困難であったが、赤十字ウェブサイトを通じて作品及び関連資料を共有し、誰もがダウンロードして教材として活用できるようになった。これを通じて、より若い世代に幅広く赤十字の意味を伝えるためにプロジェクトに参加した学生たちの貢献が作品を通して広く発信されることを期待する。



引き渡し式

3年間プロジェクトの終わりに

今年はコロナ感染の影響で私たちの生活と態度にいろいろな影響を与えた。このような時期だからこそ、赤十字がこのプロジェクトを通じて世代を引き継ぎ、みんなへ伝えようとしたメッセージの意味がより心に深く徹する。共にこのプロジェクトに参加した学生たちに苦労の拍手と激励を送りたい。

表現に関する共同プロジェクトの指導にあたり、生徒たちに具体的な作業の分担と方向性の提示の重要度、そして明確な結果物による社会発信がもたらす教育的効果を改めて確認するきっかけになったプロジェクトであった。



1. みなさんこんにちは。わたしの名前は、佐野常民（さのつねたみ）といいます。知っている人はいますか？江戸時代のおわりのころに生まれ、日本の将来のことを考え、新しい日本をつくろうと一生懸命努力し、日本の赤十字をつくりました。ぜひ、わたしの一生を紙芝居で見てください。



4. 18歳のとき佐賀にもどり、江戸の先生から教わったことをもとに、お医者さんになるためにさらに勉強し、19歳でお医者さんになることができました。24歳になったとき、佐賀藩のお殿様に呼ばれ、「日本には外国のことにくわしい先生がたくさんおられる。その先生の所へ行って勉強してください。」と言われました。



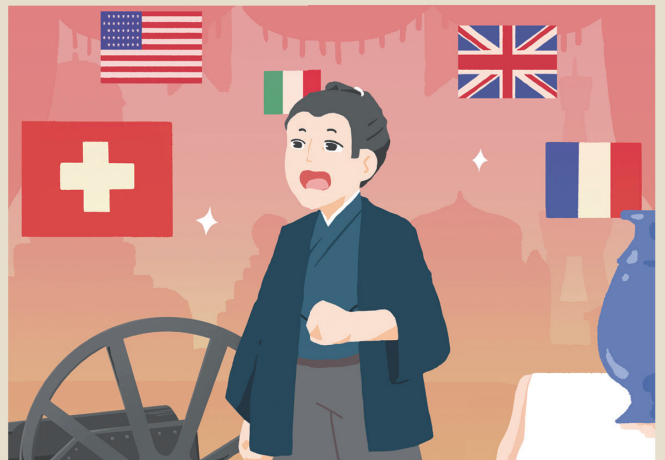
2. わたしは、今から200年くらい前、九州にあった佐賀藩（さがはん）（現在の佐賀県）のお役人で、下村（しもむら）充賛（みつよし）というお侍さんの5番目の子どもとして生まれました。小さいころは 近くの川で 魚や虫をとり、元気に遊びながら育ちました。



5. わたしは江戸や京都などで、「蘭学（らんがく）」という外国のことを学ぶ勉強にはげみ、30歳になった時、ふたたび佐賀藩にもどりました。そして、研究所の所長として京都で出会った4人の仲間とともに、世界の進んだ技術の研究をはじめました。みんなで知恵を出し合って、蒸気機関車の模型をはじめ、日本で最初の蒸気船、最新型の大砲など色々なものをつくり出し、幕府にも認められました。



3. 9歳の時、佐賀藩のお殿様たちのお医者さんをしている佐野常徴（さの つねみ）という人の子供として育てられることになりました。15歳の時、お父さんと一緒に江戸へ行くと、江戸の学校の先生から「これからは今の日本にない進んだ文化や技術を外国から学ぶことが大切だ。」といういろいろなことを教えてもらいました。



6. 44歳になったとき、わたしはフランスのバリで行われる万国博覧会に佐賀藩の代表として参加しました。そして、ここで赤十字のことを知り、強く心を打たれました。「戦争で傷ついた人は、敵味方の区別なく助ける」という赤十字の精神に、「素晴らしい。日本にもこの心を広めたい！」と思いました。日本にもどると、政府の役人となり、ヨーロッパで学んだたくさんの技術や知識をどんどんとりいれていきました。



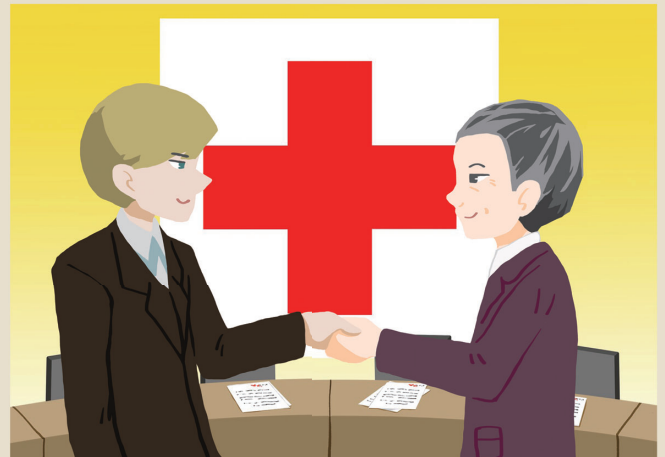
7. 1867年に江戸幕府が終わり、明治政府による新しい政治が始まると、それに反対する人たちが各地で反乱をおこし、とうとう政府の役人だった西郷隆盛までが九州で西南戦争を始めました。この戦争でたくさんの方が死んだり、ケガをしったりしたため、わたしは赤十字の考え方とやり方で、何とか助けられないかと考えました。そして、同じ考えを持つ大給恒（おぎゅうゆずる）とともに「博愛社（はくあいしゃ）」という組織をつくろうと話合いました。



10. 博愛社の許可をもらったわたしたちは、さっそく軍の病院やふるさとの佐賀の人たちと協力して、ケガ人の救護にあたりました。やはり「敵の兵隊を助けるのか」と反対する人もいましたが、この活動が日本の赤十字の最初の活動となりました。このことをきっかけに、全国の人たちが応援してくれるようになり、赤十字の考え方はしだいに全国に広がっていきました。



8. わたしたちは、「博愛社」をつくることを政府にお願いしましたが、「敵味方の区別なく救う」ということが理解されず、なかなか許してもらえませんでした。その間にも多くの人が傷つき死んでいくことに心を痛めたわたしたちは、とうとう戦争が行われている九州の熊本へ乗りこんでいきました。



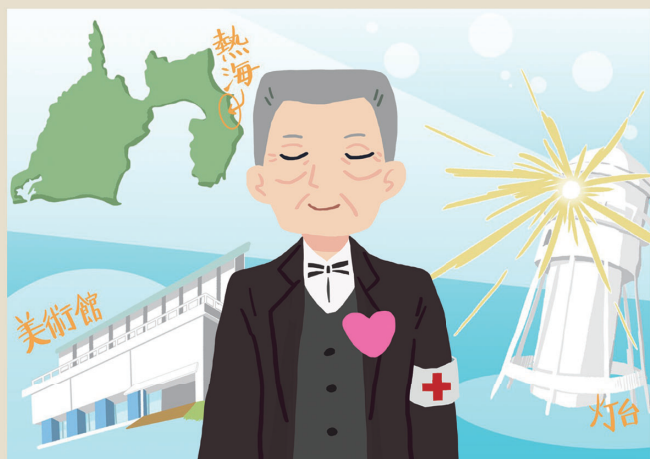
11. そのころヨーロッパでは、すでに国と国が赤十字条約という約束をもとに、協力し合いながら活動していました。わたしは、「どうすれば日本もこの条約に加わって、世界の仲間入りができるのか」といろいろな人たちに応援をもとめました。そして、1886年、日本が加わることが認められ、翌年「博愛社」から「日本赤十字社」と名前をかえ、初代社長になりました。



9. そこで、政府軍の総指揮官である有栖川宮熾仁親王（ありすがわのみややたるひとしのう）をたずねることにしました。わたしたちは総指揮官に会わせていただき、傷ついた者は敵味方の区別なく救う「博愛社（はくあいしゃ）」をつくりたいとお願いしました。すると、熾仁親王（たるひとしのう）は、赤十字の考え方や常民の熱意にうたれ、すぐにつくることをゆるしてくれました。



12. 日本赤十字社の社長となったわたしは、全国に赤十字の支部や病院をつくって病人やケガ人の治療をしたり、看護師さんの学校をつくったり、病院船をつくったりしました。また、地震や火山の噴火、津波などが発生した時の災害救護活動や国際活動など、人を救うため、いろいろな仕事に一生懸命取り組みました。



13. 赤十字活動のほかにも、灯台をつくったり、また、美術館や博物館をつくったりもしました。晩年は熱海に別荘をつくり、静岡県に住みましたが、1902年、静岡県の沼津市静浦にあった静養所で80年の人生に幕を閉じました。
新しい日本をつくるため、一生懸命に考え、行動した佐野常民。
いつも国を愛し、人を愛する気持ちを忘れませんでした。



14. アンリー・デュナンによってヨーロッパに誕生した赤十字の考え方は、日本赤十字社の活動を通して、日本全国に広がりました。
現在では世界の192の国と地域（2020年現在）に赤十字社がつくられ、世界中の子どもたちが学校で青少年赤十字の活動に参加し、世界とつながるまでになりました。

皆さんも日本だけでなく、世界の人々と「気づき、考え、実行する」の目当てを大切に、さらに活動をがんばってください！

資料のURL 各回のプロジェクト1,2,3資料のダウンロード可能
<http://www.shizuoka-jrc.or.jp/jisyo/junior/>

